

武蔵野日曜聖書講筵 祈禱会

主の用なり

——ルカ伝第19章28～40節——

1978年2月26日

小池辰雄

主の用なり 石叫ぶべし 祈り

【ルカ19・28～40】

28 イエスこれらのことを言いてのち、先立ちて進みてエルサレムに上り給う。^{のぼ}

29 オリブという山の麓なるベテパゲ及びベタニヤに近づきし時、イエス二人の弟子を遣わさんとして言い給う、^{つか}30 『向いの村にゆけ。そこに入らば一度も人の乗りたる事なき驢馬の子の繋ぎあるを見ん、それを解きて牽ききたれ。』^{ろば}31 誰かもし汝らに「なにゆえ解くか」と問わば、かく言うべし「主の用なり」と』^{つな}32 遣わされたる者ゆきたれば、果たして言い給いし如くなるを見る。33 かれら驢馬の子をとく時、その持主ども言う『なにゆえ驢馬の子を解くか』^{もちぬし}34 答えて言う『主の用なり』^{もちぬし}35 かくて驢馬の子をイエスの許に牽ききたり、己が衣をその上にかけて、イエスを乗せたり。36 その往き給うとき、人々おのが衣を途に敷く。^{みち}37 オリブの山の下りあたりまで近づき来り給えば、群れいる弟子たちみな喜びて、その見しところの能力ある御業につき、^{ちから}声高らかに神を讚美して言い始む、^{ほめたた}38 『讚むべきかな、主の名によりて来る王。天には平和、至高き処には栄光あれ』^{いとたか}39 群衆のうちの或るパリサイ人ら、イエスに言う『師よ、なんじの弟子たちを禁めよ』^{いまし}40 答えて言い給う『われ汝らに告ぐ、このともが黙さば、石叫ぶべし』

●主の用なり

ルカ伝19章28節から。エルサレム入城のところですか。キリストは、正に千里眼みたいになんどこに驢馬があるか、また、解けばこういうように訊くだろうと。そのようにまた訊くわけです。驚くべきひとです。本当に不思議ですね。現実が見えるばかりでなくて、先の言葉まで見えているわけです。

それで、問題は

「主の用である」

ということ。私たちの日常生活でも、正にこの「主の用」です。これは祈りをもってして



ないと、この声は聞こえない。何かやりながら、やること自身に祈り心があるときに聞こえる。「主の用」には二通りある。はつきりとこの世のことを拒んで、「主の用なり」と言うときと、それから、忍びつつ主の用を――表向きは主の用でない事柄において――主の用をそこでもつてつかむ。これは結局、キリストの御霊、御言が化体かたいしてないと、そういうことができない。そして、忍んで、そこに主の用が隠されていると思つてやっている、今度は顯然として主の用がやってくる。隠されたる主の用と顯あらわなる主の用と二通りある。どうせ、私たちの現実には割り切れないんです。割り切れない現実でもつてそこに隠されたる主の用をみながら、また顯なる主の用を受けとつていく。そういうようなわけです。

要するに、何をしていても、そこに、言葉の一番深い意味において、主の用をきいていると、主の用を自覚していると、その中からまた主の用が生まれてきたりする。そういうことを時々体験します。それが本当の信仰という。ご飯を食べるのも

「主の用なり」

と、極端にいうと、そういうことなんです。私たちは何を言おうがしようが、みな主に仕えているということなんです。なるほど、上司の人に仕えたりいろいろするけれども、本当の意味においては主に仕えている。でなければ、正直やりきれんです。癩しやくにさわることなんかいろいろありますが、もうひとつ奥の世界を、奥の現実をみて、そして仕える。あるときは、この世のことをけとばして、「主の用なり」ということ。だから、隠かくれたるものと顯あ然ぜんたるものと二つあるというわけです。

キリストは、ここにあるように、本当に見ていらつしやる。また、先を、人の言葉までちゃんと分かっている。まあ、大変なひとです。それはまたどういうことかというところ、キリストの祈りがかかっていると、そういうようになってしまふんです。相手の人が何も自覚してないのに、そういうようになってしまふ。キリストの祈りが、本願の祈りがそういうことを言わせる。そして、そうなるていく。そういう霊的な力ある法則が働くんですね。だから、ただ千里眼的に見ているとか、あてずっぽうでやっているということではなくて、祈りがかかっている。キリストの祈りが、願いが、意志がかかっている。そうすると、そうなるていく。それがこの素晴らしいキリストの現実なんです。

●石叫ぶべし

36 その往き給うとき、人々おのが衣を途みちに敷く。37 オリブの山の下りあたりま

で近づき来り給えば、群れいる弟子たちみな喜びて、その見しところの能力ちから

ある御業につき、声高らかに神を讚美して言い始む、38 『讚むべきかな、主

の名によりて来る王。天には平和、至高いとたかき処には栄光あれ』

ここの「平和」は「平安」と訳さなければいけません。天には平安で、地には平和なんです。いつも申しあげているとおり、平安が先で平和は後です。



39 群衆のうちの或るパリサイ人ら、イエスに言う『師よ、なんじの弟子たちを禁めよ』

そして、パリサイ人が言うわけです、

「とんでもないことを言う」

と。「主の名によりて来たる王」なんてことを言いましたものですからね。この言葉が躓きになる。ところが、これは、

「私は天界の王者なので、地界の王者ではない」

ということ。それを既に誤解しているわけです、取り違えをやっている。

40 答えて言い給う『われ汝らに告ぐ、このともが黙さば、石叫ぶべし』

「黙さば、石叫ぶべし」

と。石も叫ぶという。しかし、黙さなくても、石は叫んでいるですよ。私たちの祈り、叫び、告白、それと一緒にこの無心の自然が唱和している。相和している。石も一緒に叫んでいる。星も叫んでいる。これは詩篇の中に、

「何々を讚美せよ、讚美せよ」

と言っているでしょ。

また、アツシジのフランシスは

「兄弟、狼よ」

とまで言ってしまった。アツシジのフランシスが「兄弟、狼よ」と言うときには、人に食いつくような狼が、「兄弟」と言われたその言葉でもって、その愛の言葉で狼の方が穏やかになってしまう。変質させてやるわけです。まあ、大変なことです。

だから、キリストの霊の世界の力というものは凄いんです。これはもう本当に福音書の現実というものは、何と言ったって、キリストの言葉とキリストの行為にはかなわんです。これはもう桁違いかかわらない。イザヤ書は凄いと仰いましたけれども、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書は聖書66巻の中で一番の焦点なんです。聖書の焦点は、何と言っても、福音書です。塚本先生が福音書を生涯の研究の対象になされたのは、その点は非常に結構なことだった。

それで、私たちも、誰が味方しなくても、あの冷たいような石が叫んでいてくれる。いや実に、孤軍であればあるほど、かえってそういういったような自然界における沈黙の雄叫びというものがある。私はこのキリストの

「石叫ぶべし」

という言葉は素晴らしいと思う。どうぞ、キリストの言葉は無条件に受けとっていかなくてはダメですよ。

「そういうことがあるんだろうか」

なんて言っているうちはダメなんです。「石叫ぶべし」というようなこの言葉の、一体、中



身は何だと。「何だ」ということは、頭で疑問するのではない。

「何という驚くべきことか」

と。何か知らんけれども、一番叫ばない一番音がしないような石が音を発するという。どうして、キリストがこういうことを仰るかと思うですね。

私たちの日常生活の中には、そういう意味おける

「主の用なり」

ということがある。よく、チャンバラに出てくるね、

「御用！」

なんて言つて、提灯ちようちんをさげたりして（笑）。正に我々は御用提灯なんだ。動く御用提灯であるというわけです。それではお終い。

● 祈り

祈ります。静かに深く祈りたいです。では、私が一番先に祈りますから、あと、別に順番も何もいらなから短く祈ってください。

主さま、あなたはエルサレムへの入城の時に、大事なあなたの地上の歴史の終りの、一端に向かってお進みになるときに、驢馬に乘ろうとされました。その驢馬がいずこにあり、またその紐を解く者にどのように人が尋ねるかを、既に祈りをもつて予見し、また予聞し、その通りになっていきました。あなたは本当に十字架のゴルゴタに向かって凱旋將軍の如くに進んで行かれました。

そして、「主の用なり」と言われました。私たちもまた、あなたの御用という、そういう存在として、人生において何をしていても、隠然たるまた顕然たる御用をなして進んで行きたく存じております。その自覚をいよいよ新たにし、その御用であるところはあなたの本願のかかる場所ですが、必ず本願のかかる場所には力がきます。それゆえに感謝いたします。そして、あなたのご栄光が天に現れ、また地に現れます。

どうぞ、そのようにして、私たちを通して、人がどう思うとどう見ようと、そんなことに頓着とんちやくすることなく、あなたの御意をなし、またご栄光を現すようにしてください。願ひ奉ります。

今日は、遺れる兄弟姉妹たちとこのような祈りのときを持たされ、感謝いたします。「石叫ぶべし」と。この自然界の星もまた海も、また石も草木も、みな私たちと共に御名を讃え、真理の味方となつて叫んでおることを、この「石叫ぶべし」の一言のうちに大自然の唱和を感じて感謝いたします。

この大自然のあなたの創造の業の中から、パウロもローマ書8章で言いましたように、叫びまた呻いているところの万象と共に、私たちはあなたの御国をいよいよ来たらせ給えと待ち望んで、この生涯を勇ましく進んで行きたく存じます。今、志を共にしている兄弟



姉妹たちと共にこの時を持たせられ、いよいよあなたの民として志を共にし祈りを共にし、共に助け合つて進んで行くことができることを喜ばしく感謝いたします。

今日はまた、A君がはるばるやって来ました。本当にうれしいです。この福音において喜びを共にし希望を共にすることほどうれしいことはありません。あの三島の特別集会がA君にとって大事なひとつのカイロスであったことを思い、私たちは御名を讃え奉ります。また、M君はあちらで

「今日は、先生、来れませんが」

と言つて、懇ろな電話をくれましたが、本当にまた彼の幕屋をいよいよ力づけてくださるように願ひ奉ります。また、H君も共に来て、私たちはそこここに幕屋を張りながら、本当に兄弟協力して行きます。I君の奥さんも来られました。

私たちは垣根なしに、あなたの本当のエクレシアとして、活けるエクレシアとしてこのようにして時を過ごし、また互いに助け合い、そしてまた一週間一週間が、どこであろうとも密かに祈るときに、今賜りましたように、必ずそれが成就していくことをいよいよ受けとつて進んでいくことができますことを感謝いたします。

どうぞ、御意にかなつているところには、必ずそのことが成ることを、あなたが仰つていとおり、この根源現実をじりじりと受けとりながら、ただ御名のゆえに、あなたのご栄光のゆえに、私たちは本当に感謝、讃美するだけでございます。いかなる艱難がきても、くればくるほどいよいよ逆に力強くせられることを受けとつて、感謝いたします。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン！

